

氏名	熊田泰章 (教授)
こんな研究をしています	「テクスチュアリティ研究」が専門です。こここのところ書いている論文では、「間文化性=インタークルチャラリティ」という新しい概念について研究しています。「主体」が他者との関係性の中に構築されるように、「文化」も、実体的に存立しているのではなく、関係的に構築されるものです。「文化」の仕組みをこのように定めることによって、排他的になることと無縁に「個々の文化の独自性」を主張できると考えています。
こんな成果を挙げています	1. 「世界理解の表出としての言語テクストと図像テクスト－ボッシュとゴヤの絵画を例として－」『異文化 17 号』法政大学国際文化学部紀要、2016 年 2. 「グローバリゼーションの原理としての記号的従属および動的編成と相互変容－個人と文化の相互的生成と変容についての一考察－」『異文化 16 号』法政大学国際文化学部紀要、2015 年 3. 「唯一であることの相対的価値についての試論－芸術作品における内在性と行為性－」『異文化 15 号』法政大学国際文化学部紀要、2014 年 4. 「絵画のナラトロジー試論－知ることと見ることと語ることの本来の役割同一性についての一考察－」熊田泰章編『国際文化研究への道－共生と連帶を求めて』彩流社、2013 年 5. 「翻訳の<前提／結果>としての「多文化性」に関する考察－<個々の／総体としての><テクスト／文化>が<依拠する／作り出す><独自性／普遍性>－」『異文化 13 号』法政大学国際文化学部紀要、2012 年
ほかに、こんなジャンルに関心をもっています	自分の研究史として挙げれば、以下のことについて考察してきました、また、継続しています。 1. ヨーロッパ昔話の構造研究・分類研究 / 2. 小説の語りの構造・ナラトロジー / 3. 読者論 / 4. 翻訳論 / 5. 文化記号論
こんな授業を行なっています	「個」がいかにして存在するに至ったか、また「個」がいかにして表象されるに至ったかについて考察することを通して、「間主観性」「間テクスト性」「間文化性」という概念をつきつめていくことを課題としています。修士課程の授業では、目下のところ、肖像画を取り上げて、トドロフの著作を精読し、加えて、ベームの著作を合わせて読むことで、語ることと図像で描くことの対比を行うことに取り組んでいます。
学会や社会でこんな活動をしています	日本全国の大学の国際文化学部・国際文化研究科等の教員・大学院生が会員となっている日本国際文化学会で2期にわたり会長を務めました。法政大学では、副学長・常務理事として職務に当たりました。
研究分野の基礎文献を紹介します	1 ゴットフリート・ベーム『図像の哲学　いかにイメージは意味をつくるか』塩川千夏・村井則夫訳、法政大学出版局、2017 年 2 ツヴェタン・トドロフ『個の礼賛　ルネサンス期フランドルの肖像画』岡田温司・大塚直子訳、白水社、2002 年 3 ツヴェタン・トドロフ『ゴヤ 啓蒙の光の影で』小野 潮訳、法政大学出版局、2014 年 4 ミシェル・フーコー『マネの絵画』阿部崇訳、筑摩書房、ちくま学芸文庫、2019 年 5 フェリックス・ガタリ『人はなぜ記号に従属するのか－新たな世界の可能性を求めて』杉村昌昭訳、青土社、2014 年 6 熊田泰章編『国際文化研究への道－共生と連帶を求めて』彩流社、2013 年